

2019 年度かながわ環境カウンセラー協議会現地研修会

福島仲間たちとの交流会

～震災復興と福島第一廃炉作業の見学会～

(2019 年 8 月 3 日～4 日)

実施報告書



2019 年 8 月 3 日南相馬市小高区浦尻にて

2019 年 9 月

NPO 法人かながわ環境カウンセラー協議会

2011年3月11日に発生した東日本大震災。「一度、ご自身の目で現地を見てほしい。力を貸してほしい」との南相馬市内にお住いの環境カウンセラー・長澤利枝さんの呼び掛けに木村理事長（当時）が呼応して、当協議会と福島の間たちとの交流は始まりました。大震災5ヶ月後に行った被災地・避難所訪問から数えて6回目となる今回、訪問の概要と14名の参加者の感じたこと・思ったことを小冊子にまとめました。

震災当時、関東圏に住む私たちの生活に欠かせない電力の一部は、福島県浜通りに設置された東京電力福島第一・第二原子力発電所や広野火力発電所、中通りや会津に設置された水力発電所からの電力で賄われていました。原子力発電所の事故に伴い福島第一・第二原子力発電所での発電が止まり、電力自由化が進んだ現在でも、少なからず福島県にお世話になっていることに変わりはありません。

今年は、かながわ環境カウンセラー協議会が1999年に法人化してから20周年になります。「社会のお役に立つ」との設立当初の諸先輩の志を大切に、長年お世話になってきた福島県にどのような恩返しができるのか問い続けていきます。

2019年9月

NPO 法人かながわ環境カウンセラー協議会理事長 河野 健三

福島の間人たちとの交流会 ～震災復興と福島第一廃炉作業の見学会～
実施報告書

目 次

1. 『福島の間人たちとの交流会』実施報告書に寄せて	
相双地方地域再生創造プロジェクト実行委員会会長 長澤 利枝	… 1
2. 『福島の間人たちとの交流会』の記録	
(1) 相双地方地域再生創造プロジェクト実行委員会交流会(8月4日)実施要領	… 2
同 上 概要 記録：眞砂文夫、監修：長澤利枝	… 3
(2) 福島第一原子力発電所廃炉作業状況の見学(8月3日)	… 9
(3) 復興状況の視察見学(8月3日、4日)	…10
3. 福島交流会参加報告	
▶ 環境カウンセラーの役割に気づかせてくれた福島交流会	河野 健三(横浜支部) …11
▶ 福島訪問記(2019.8.3~8.4)	大竹 順之(横浜支部) …12
▶ 相双地方地域再生創造プロジェクト実行委員会他との交流会、東京電力 原子力発電所廃炉状態見学(令和元年8月3~4日)	大野 昌美(横浜支部) …13
▶ 福島の間人たちとの交流会参加感想	小川 斉(湘南支部) …14
▶ 「2019 福島の間人たちとの交流会」に参加して	掛橋 俊彦(県央支部) …16
▶ 福島交流会の感想	岩村 順雄(横浜支部) …17
▶ 福島交流会の感想文	近藤 勝養(川崎支部) …17
▶ 8年後の福島	木村 信幸(横浜支部) …18
▶ 福島との交流会の感想	茂木 照雄(川崎支部) …21
▶ 福島交流会および東電廃炉施設見学会に参加して	眞砂 文夫(横浜支部) …23
▶ 2019年福島第1廃炉見学会及び交流会に参加して	千葉 雅子(横浜支部) …24
▶ KECA 福島交流会 2019年現地訪問感想文	原 洋夫(横浜支部) …24
▶ 福島交流会の感想文	玉川 達久(横浜支部) …26
▶ 復興は進み、復興は進まず	大曾根健久(横浜支部) …27
4. これまでの福島交流会の足跡	…29

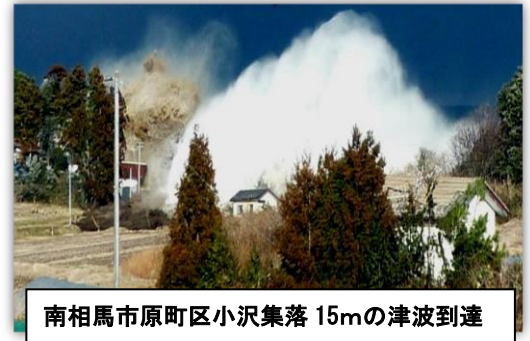
福島仲間たちとの交流会

～震災復興と福島第一廃炉作業の見学会～

KECA では東日本大震災の 5 ヶ月後から福島の環境カウンセラー仲間と交流会を行ってきました。

震災後 8 年を過ぎた今年は、1 日目：東京電力福島第一原子力発電所の廃炉作業見学と大熊町・双葉町帰還困難区域等見学、南相馬市の農家民宿へ宿泊、2 日目：福島県相双地方で復興に取り組んでいる皆様との交流を深めます。

多くの皆さまのご参加をお待ちしています。



廃炉作業の現状（東京電力 HP より）

1号機	今後の燃料取り出しに向け、飛散防止を徹底しながら建屋内のガレキ撤去を実施中
2号機	今後の燃料取り出しに向け、原子炉建屋内の線量低減対策と建屋解体に向けての放射性物質飛散防止対策を検討中
3号機	2019年4月に、使用済燃料プールからの燃料取り出し作業を開始
4号機	2014年12月に使用済燃料プールにあった全ての燃料を建屋外に取り出し済み
5号機	2014年1月31日付で廃止。今後、研究開発等の実証試験で活用することを検討
6号機	

【実施日】2019年8月3日（土）～4日（日）

【日程】

■ 8月3日（土）

06:45 横浜駅東口バスロータリー集合

06:50 出発<チャーターバス（車中昼食）>

11:15～12:05 廃炉資料館にて机上説明、入構手続き

<見学者用バスにて福 I 原子力発電所へ移動、入構準備>

12:45～13:45 福 I 構内 **廃炉作業状況の見学**<構内専用バス>

<出構手続き、廃炉資料館への移動>

14:35 廃炉資料館発<チャーターバスにて南相馬市へ移動>

途中、車窓から**大熊町・双葉町帰還困難区域状況見学**

15:00 長澤様・岩橋様と浪江町役場駐車場場で合流後、岩橋様の案内で**浪江町請戸・南相馬市沿岸地域・除染廃棄物仮置き場等の状況見学**

18:00 頃 民宿いちばん星着（南相馬市原町区金沢追合 116）

■ 8月4日（日）

08:30 チャーターバスで **南相馬市周辺の復興状況視察**

10:00～12:30 **相双地方地域再生創造プロジェクト実行委員会との交流会**

於；道の駅南相馬多目的ホール <法螺貝吹奏・地元民謡・鎧兜着付け体験・談話会・昼食>

13:00 南相馬市出発

18:00 頃 横浜駅東口帰着

【参加費】1人 25,000円～30,000円(参加人数による)

チャーターバス代、宿泊代、2日目昼食代、

謝礼品代、他

【対象者】KECA 会員

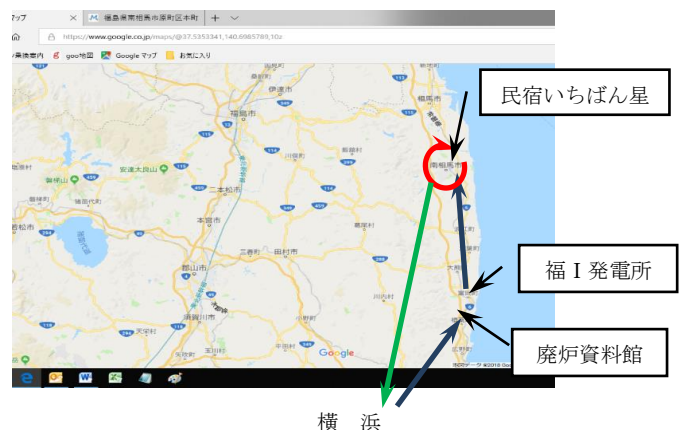
【申し込み】メールないし Fax で KECA 事務局へ氏名、

住所、連絡先電話番号をご連絡ください(様式自由)。

Email : 37keca@biglobe.ne.jp Fax : 045-226-5825

【定員・締め切り】先着20名 6月30日（日）締め切り

【注意事項】福島第一原子力発電所への入構にあたり、事前の見学者リストの提出や当日の本人確認（運転免許証等の提示）等が行われます。参加者には詳細をご連絡いたしますので、ご協力をお願いいたします。



1. 福島交流会実施報告書に寄せて

相双地方地域再生創造プロジェクト実行委員会会長 長澤 利枝

NPO 法人かながわ環境カウンセラー協議会さんの視察・交流から、すでに 1 か月、季節は初秋になりました。

8 月 3 日、4 日の二日間、都会の酷暑を脱出し、遠路浜通りにお出で下さった最初のおもてなしは浜風でした。当地も暑い日々が続いていましたので、ホッと致しました。

顧みますと、平成 23 年 3 月 11 日の「東日本大震災」直後の 6 月、NPO 法人環境カウンセラー全国連合会（ECU）の総会で被災地の窮状を訴えました。ECU の初代理事長である先崎武氏（福島県出身）が、いち早く当地へ赴く旨を伝えられました。

かながわ環境カウンセラー協議会さんの対応はすばやく、2 ヶ月後の 8 月 10 日、11 日に、木村理事長（当時）と 11 名の皆さんがボランティア活動と現地視察を行うために訪れてくださいました。ホテルで夜遅くまで掛かって作った応援旗と紙芝居、鳩サブレ持参で、福島県立運動公園内避難所を一緒に訪問しました。南相馬市の津波の惨状に驚愕され、皆さんそれぞれ深い思いを抱いて帰りました。

翌年 4 月 21 日、復興再生事業「にじをつなぐ～友・有・悠」に 5 人が参加協力でお出で下さいました。忘れもしない・・・50 年振りの大雪。会場の変更でスペースが狭くなりましたが、工夫した自然科学の実験、手遊び等で来場者にとっても人気のスペース。忘れられない一日でした。

その後 4 回へと続く「交流と視察」は、温泉宿で座を崩しての語り合い、余興などで何時の間に「良き仲間」となり「心がひとつになる」という感慨を持ちました。かながわさんとは、有縁だったのです。

今回の「福島の仲間たちとの交流会」は、3 月に実施方向で検討し、4 月に計画案が示されました。かながわさんの大きな事業としての位置づけを知り、私も同じ仲間として企画に意見を述べさせて頂きました。「始め良ければ終わり良し」となりました。かながわさんたちと地元仲間たちの心は、交流会で実を結びました。お出で頂きましたことに感謝を申し上げます。ありがとうございました。

私ごとですが、震災直後から今日まで現場を取材続け、年 2 回の記録を作成しています。今、「震災から 8 年 7 ヶ月 被災地に生きる・・・」を作成しています。～記憶から記録へ～私の、被災地に住む環境カウンセラーの使命と思っています。かながわさんとの交流を書くつもりでいます。

8 年に及ぶ長いかながわさんとの交流が、今年の新たな出会いと、これまでの継続を「地域を越えた交流は、それぞれの立場を尊重し自然体で続いていく」ことを願って、私の拙い寄稿と致します。

最後に、NPO 法人かながわ環境カウンセラー協議会様の、益々のご発展とご活躍をお祈り致します。



交流会の冒頭、挨拶に立つ長澤会長

2. 『福島の仲間たちとの交流会』の記録

(1) 相双地方地域再生創造プロジェクト実行委員会との交流会（8月4日）

実施要領

1. 目的 NPO 法人かながわ環境カウンセラー協議会さんとの交流は、震災直後 8 月から今日まで続いている。ボランティア活動、現地視察等を通して、被災地の現状を伝えて頂いている。今回は「復興再生事業」に取り組んでいる地元仲間たちと、伝統文化の披露、震災 8 年 4 ヶ月の現状、今後の課題等を懇談し、それらを共有することを目的とする。
2. 日時 2019 年 8 月 4 日(日) 9 時 30 分～13 時
(8:30～9:30 北泉海水浴場・ロボットテストフィールド視察案内：長澤)
3. 場所 道の駅南相馬 多目的ホール
4. 参加者 相双地方地域再生創造プロジェクト実行委員会 10 名
NPO かながわ環境カウンセラー協議会メンバー 14 名
「福島を伝える会」千葉県会員 2 名
環境省福島地方環境事務所浜通り北支所
道の駅南相馬 駅長
雲雀法螺貝愛好会 8 名
郡山アマチュア無線会員 1 名
5. 内容
 - 9:30～9:40 (1)雲雀法螺貝の吹奏で、一行を迎える
 - 9:40～9:45 (2)雲雀法螺貝合図による黙祷
 - 9:45～10:15 (3)伝統文化の披露・雲雀法螺貝吹奏・民謡相馬流山・法螺貝吹奏体験
 - 10:20～12:00 (4)懇談会
 - ①挨拶 相双地方地域再生創造プロジェクト実行委員会 長澤会長
挨拶 NPO 法人かながわ環境カウンセラー協議会 河野理事長
 - ②2013.3.11 当時の状況
道の駅南相馬 駅長：大竹氏
原町区大甕地区福祉委員：小西都氏
 - ③「被災当時、8 年 3 ヶ月を経ての思い」 参加者 7 名
 - ④「南相馬市の除染廃棄物現状について」
環境省福島地方環境事務所浜通り北支所 櫻庭氏
 - ⑤「自分たちで身を守る防災について」 郡山アマチュア無線会 佐久間会長
 - ⑥質疑応答・感想等
 - 12:00～12:40 (6)昼食
 - (7)閉会
 - (8)お見送り

相双地方地域再生創造プロジェクト実行委員会交流会の概要

実施日：2019年8月4日（日）

場 所：南相馬市 道の駅南相馬

記 録：眞砂 文夫

監 修：長澤 利枝氏

1. 実行委員長 長澤会長 御挨拶

昨晚の情報交換に引き続き交流会をさせていただきます。

○今日は、相馬野馬追で有名なほら貝の演奏でみなさんをお迎えしました。

○昨日・今日の視察に続き、被災地の方々の体験された話を聞かれまして、風化しつつある現状を是非伝えて頂きたいと存じます。

2. 道の駅南相馬駅長 大竹さん

○23km地点に避難者集合・・・避難者 120名

○被災後4日間の断水でトイレが使えない事態になったが、道の駅のトイレだけの利用は保持した。

○放射能対策説明会の開催・・・不安の解消

○6月1日(3ヶ月ぶりに)営業再開。

○今、ここにいることが幸せ。

3. 原町区大甕地区福祉委員 小西さん

○避難者へのご飯の炊きだしを担当

○震災当日は午前中、中学校の卒業式があった。

○10mの津波が来るとの事前情報が有った。現実には15m。津波に遭った人々の衣服はびしょ濡れ、その上寒さで震えていたことを思い出す。

○地元の仲間に、炊飯ジャー、お米持参を呼び掛けた。快く応じてくれたが、このような状況なのにある地元市議員の方は断った。

○そんな時、私の同級生が一俵のお米を持ちこんでくれた。役所もこの事で対応が変わった。

○翌日から暖かいご飯の炊きだしが始まった。

○おにぎりを作っていた時、一人の女性が「おにぎりにぎらせてください」と手を出した。するとその手はぶるぶると震えておにぎりがにぎれない。浪江町から車で逃げてきたが、途中でガソリンがなくなりここまで歩いて来たとのこと。校庭には浪江から来た人たちがたくさんいた。寒いので、校長先生に頼んで教室に入ってもらい、おにぎりを食べて頂いた。決して忘れられない。

4. 佐山建築 佐山社長（小高・浪江地区中心にお得意様を持っていた建築会社社長）

○ご主人が平成9年他界、震災後4人の子供さん家族とともに東京・仙台に避難

○5月になり、息子さん達とお父さんが世話になったお客さまがお困りなのを放置できないと原発から20km圏外に仮事務所を移転し、事業継続。小高区の本社事務所の放射能・・・5.8ベクレル以上。

- その後、原町区に事務所兼作業所を設置、3人の子供達の家族は放射能の事もあり原町地区の住宅へ移転。小高区本社は、解除と同時に作業所としての機能を回復した。
- しかし、小高・浪江地区に戻ったお客様家族は30世帯のみ。(子供さんのいる家族は戻ってこない)
- 今の不安
 - ①いまのままで子供たちが、ここで建築業が続けていけるだろうか。
 - ②ほとんどの親と子供達家族が、バラバラに住む生活がいつまで続くのか。
 - ③農家の人達がいつになったらお米を作り始めてくれるのか。

5. 障害者自立研修所NPO法人さぼーとセンターぴあ施設長 郡 信子さん

- 胃瘻(いろう)者、自閉症等の患者の介護施設
- 震災当時南相馬市 7万人の人口は1万人に減少。施設の職員も24人が3人に減少
- かろうじて電話だけは通じていた。
- 震災当初、バス・車で避難先へ移すことを決めたが、この人たちをどう介護するかに直面した。
- 当初全国から2500人のボランティアに来てもらい、「お風呂」「食事」「送迎」を頼んで生き延びてきた。
- 今、自立研修所の利用者が増加して困っている。
- 職員も半年勤まれば長い方で、しかも50代の職員がほとんどである。
- 現在は、「PTSD(心的外傷後ストレス障害)」「いのち」との戦い。
- 「生きるという根源とどう向き合うか」が施設内の共通の問題になっている。
- 是非、手を差し伸べてほしい。

6. 原町聖愛こども園 遠藤美保子園長

- 保育理念は、自然との触れ合いを通して五感を育むこと。
- 放射能汚染から3年間は、外の遊び時間、マスク着用、衣類のほこりを払うなどの規制を行った。
- 震災当初・・・泥に手を付けられない園児、水を怖がる園児
- 園庭の除染を徹底し、外遊びのできる環境整備をした。砂場、小川、樹木の植栽など。
- 今は行動規制を解き、小川は四季を通じて子供たちの人気の場所になっている。
- 放射能汚染で寸断された自然遊びは、子供の遊びと発達の変化に繋がっていることを物語っている。
- あってはならない放射能汚染！！絶対に起こしてはならない、「原発事故」！！

7. 8年経って思う事、訴えたいこと(交流会に参加した地域の方々より)

鈴木さん

- 何も起こらないで普通の生活ができることが一番の幸せです。

門馬さん

- 帰還して、もとの知り合いと暮らせる幸せを実感している。

渡部トメヨさん

- 農業をする人がいなくて、この先、先祖から受けた土地で農業が出来ないこと。

桜本さん

- 障害を持つ子供がいて震災当初避難をしなかった。放射能でこの娘と死んでも構わないと思ったが、子供から避難をしようと言われて横浜、群馬へと避難した。
- 親戚の横浜に行っても群馬に行っても、車いすで生活する程の広さはないので、結局地元に戻った。



被災や避難された方々から様々な体験談や
思いをお聞きした

- 被災地の私達は大変だと言われるが、自分達で前を向いて頑張るしかないと思っている。

伏見さん（家族4人と犬1匹で暮らしていた。義母90歳、隣家の私の両親2人）

- 宮城の白石へ避難した。・・・避難先では14名の在所帯だった。
- 今は自宅で夫、娘と3人で暮らしている。家族一緒に暮らすことが一番の幸せと思う。

原 美幸さん

- 大学の娘と母で、郡山と土浦に移り住んだ。
- 震災の2年後、家族全員地元に戻った。避難先で亡くなる方が多い中で、良かったのは、今年7月88才で母が地元に戻って他界してくれたこと
- 割りきれないのは、自分たちの住んでいた土地に、国策とはいえ広大な土地にロボットテストフィールドを作っていること。地元の我々にしてみれば何か割切れない気持ちがしている。

雲雀法螺貝愛好会 原 順一さん

- 原発は人災事故であり、永久に許せないと思っている。
- 稼働中、原発の人は2度こう言っていた。・・・「原発は非常電源もあり、絶対安全だ」しかし、電源装置が地下に有り、津波で非常時使えなかった。・・・地下に造ったのが間違い。水素爆発に至るとき、国の当時のリーダー「菅首相」の判断の遅れ等々、今尚悔しさが消えない。
- 私の家は、原町地区の山奥の集落。278世帯有ったが、今は高齢者だけが残って若い世代はいない。いずれ地域は崩壊する。
- 出ていった若者と家族は、避難した先で本来の生活を始めていて帰ってこない。

8. 環境省 福島浜通り北支所 櫻庭さん

- 新地町、南相馬市、浪江町の除染を担当。南相馬市を重点地区に活動している。
- 令和元年度は、身近な場所から仮置き場をなくすことを目指し、400万㎡程度を輸送する。
- 平成30年3月19日までに、帰還困難区域を除き8県100市町村の全てで面的除染は完了した。

- 現在は、原発の施設の回りに793m³の貯蔵施設を整備し、解体家屋の建材を2650軒分置いた。
- 今後は、令和3年までかけて中間貯蔵施設から受け入れた除染土壌を分別し、改質剤を混ぜて剥離し、元に戻せる状態になった土壌を貯蔵施設に戻すことにしている。

9. 身を守る防災活動について

郡山アマチュア無線会長・環境カウンセラー 佐久間さん

- 自然には勝てない。
- 震災当日、消防・警察ともに無線を使わせてもらえなかった。
- 災害の対応は、医者と市民の協力を得て相互強調すべき。
- 環境カウンセラーとして日本の電波を使って、病院とのネットワークを作りたいと思っている。
- 太平洋プレートが福島沖に有り、その力が福島県の中通り地方に伝わり、猪苗代方面の火山が噴火するという予測がある。

10. 南相馬市市長 門馬和夫氏

- NPO法人かながわ環境カウンセラー協議会さんは、震災当時から8年お出で下さっているとのこと、心から御礼申し上げます。
- このような会が開かれていると聞いて、駆け付けた。おかげさまで復興も一歩・一歩進めている。
- 12時半から廃炉作業についてのフォーラムがある。
- 問題は、「汚染水」「除染廃棄物」「廃炉廃棄物」をどうするかだと言われている。

11. 雲雀法螺貝愛好会 原会長さん他会員7名

「新防波堤」

- 新防波堤が出来て魚釣りの場所が無い。超えた津波が引かなくなるという心配もある。
- どちらかという、昔の様に海が見える方が良い。
- 新防波堤から200mには建物を建てられなくなった。その間には防風林を植えている。

「震災後の新たな動き」

- 震災後の農地に太陽光パネルを敷設・・・おそらく日本一の数だと思う。
- 企業化して農業に従事する若者が生まれている。(自営はしない)
- 慰霊の会が定期的に設けられるようになった
- 焼却場で「解体家屋」「除染分別後の廃棄物」の焼却の他に、震災後歩き回っていた「1000頭の猪」の焼却を行う計画でいるとのこと。

「原 発」

- 第二原発の廃炉が決まったが、燃料棒をどこへ持ち出すのか。
- 震災前に出ていた東電からの県へのインシデント報告書はでたらめばかりだったことがわかった。
- 廃炉費用を電力の利益からまかなうと言うが、実際は関東の電力使用者(皆さん)の電気代から払われることを認識してほしい。

「震災被害」

- 今回の津波で636名の死亡者が出た。震災関連死は、3縣市町村で南相馬市が513人で一番多い。
- いまま帰還困難者区域で地域が分断されている。原発に近い所は帰還の目標期限予測が立たないので、集団での疎開地を作ろうとしていると聞いている。
- 水害で流された人（家族）と、原発事故で被災した人（家族）では国の補償に億単位の開きがある。
- 農業・漁業をしていた人たちはじめ、この8年でやる気を失った。

「食物の放射能測定」

- 野菜の土を落として、水で洗って測定する。・・・ゼロ？シーベルトしか出ない。

「係争の行方」

- 東電トップの裁判の結果をしっかりと出すことが、今後の福島県の在り方につながる。
- 自主避難者の東電への損害賠償訴訟は、県民の受け取りに相違があるので、客観的に経過を視ていくことが大切と思う。震災直後から、南相馬市は小高区、原町区、鹿島区に分断され、しこりが残っている。

「夢」

- 春は「山菜」、夏は「釣り」、秋は「きのこ」採りができる故郷に戻ってほしい。地元皆さんの気持である。
- 「被災者一人ひとりがお互いの価値観を尊重し、それぞれの損害を理解する努力を粘り強く続けること」
 - ・・・それが遠回りのようで、放射線災害、最大の社会の病といえる＜分断＞解消の第一歩である。（私たちの仲間である脳神経科学者・伊藤浩志氏の「なぜ、福島は分断するのか」の文章から抜粋）



「南相馬市観光ボランティアガイド資料」より

【NPO法人かながわ環境カウンセラー協議会】と

【相双地方地域再生創造プロジェクト実行委員会】との交流会

日時 令和元年8月4日 場所 道の駅南相馬



雲雀法螺貝愛好会の吹奏で皆さんをお迎え



法螺貝体験 音の出る人、出ない人・・・



吹き方を教えてもらっ みんな本気で～す



「交流会」始まり まずはお互いの挨拶から



道の駅大竹駅長さん 3.11の当時を語る



門馬市長さんのご挨拶 かながわさんへの感謝のこぼ



郷土料理
「弁慶煮」の
いわれを語る
渡辺トメヨさん



交流会
心と心との
響きあう
ひととき～

(2) 福島第一原子力発電所廃炉作業状況の見学（8月3日）

東京電力廃炉資料館（富岡町内）で机上での概要説明、当時の映像上映、展示物による説明を受けた後に福島第一原子力発電所の構内に移動し、50分かけてバスの中から廃炉作業の状況について見学した。



廃炉資料館に設置された大型スクリーンに映し出された廃炉作業に見入る KECA の面々。あたかも作業現場の前にいるような感じを覚える。



1号機：水素爆発により原子炉建屋の外壁が飛ばされ、上部は鉄骨がむき出しとなっている。鉄骨の中、写真の右側に見えるのは使用済燃料プール。現在、392本の燃料棒が入っている。



構内見学用バス車中：バスにて移動しながら構内の主だった箇所の前で停車し、写真パネル等も使いながら説明を受けた。



3号機原子炉建屋を下方から臨む。放射性物質飛散防止のために外壁があらたに設置されている。



建物名称は不詳。コンクリートと鉄筋の瓦礫と化している。



1/2号機排気筒：高さ120m。耐震強度が低下しているため2019年8月から上部60mを撤去する工事が始まった。

(3) 復興状況の視察見学 2019年8月3日、4日



岩橋さんの案内で被災地の復興状況を見て回りながら当時の様子などの説明を受けました。



所々でバスを降りて説明を受けました(小高区浦尻にて)。



相馬馬廐舎にて。相馬馬追いで活躍するとともに、地元の高校の馬術部員が乗っているとのこと。



写真中央に枯れ木が数本立っている。津波に洗われ、その塩害のために立ち枯れした。



北泉海水浴場にて。護岸や緑地公園、トイレなどが整備され、この日もサーファーや海水浴客が訪れていた。



南相馬市鹿島区内の仮設住宅。入居者は自ら土地を求めたり、集団移転などによりほとんどの方が退去している。年内には取り壊される予定

3. 福島交流会 参加報告

環境カウンセラーの役割に気づかせてくれた福島交流会

河野 健三（横浜支部）

私は 2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災から 5 ヶ月後の交流会から、今回まで 6 回の交流会に参加してきました。これらの交流会で多くのことを学びましたが、特に今回の交流会では環境カウンセラーの役割に気づかせてくれたと考えています。

環境カウンセラーの役割、それは「つながりをつくり、そのつながりの中から課題解決につながる成果を探し出していく」にあるのではないかと考えています。

前回までの交流会では「自然の恐ろしさと大切さ」、「心の問題はながく残る」そして「我々の生活に欠かせない電力は福島の世話になっている」の三つことを学びました。自然災害の恐ろしさは言うにおよびませんが、一方毎日の生活に欠かせない食料や事業に必要な材料等の資源をもたらしてくれる自然を守ることの大切さ、津波・原発事故による心の問題に欠かせないお互いの「信頼感」、そして我々の生活はいつも誰かのお世話になっているので「謙虚さ」が必要、という三つのキーワードでした。

6 回目となる震災 8 年後の今回の交流会で直接被災された方々のお話しをお聞きし、あらためて地震・津波という自然災害に加えて、原発事故が起こったことが如何に福島の皆様を苦しめているかということに気づかされました。交流会で印象に残ったお話しは次の三つです。

- (1) 原発事故は人災である。その理由は「非常電源装置の設置が地下であった」ことと「水素爆発を起こしてしまった」こと。
- (2) 汚染水と放射線廃棄物処理を含めた廃炉作業は今後 40 年続く。
- (3) 「家族と一緒に過ごし、普通の生活ができることがいかに大切なことか」が分かった。（これは一方では家族の分断が起きているということです）

これらのお話しは原発事故が如何に地域、家族に大きな影響を及ぼしているかということをお話ししています。一方、被災者の皆様がしっかりと前を向いて、地域で生活していこうとの強い思いに心を打たれました。復興の足音は確かに進んでいるのですが、まだまだ遠い道のりがあります。

今回被災者の皆様から伺った「原発事故」「廃棄物処理」「家族・地域の分断」という重い課題の解決には長い歳月を要すると思います。前回までの交流会で学んだ三つのキーワード「自然」「信頼感」「謙虚さ」を肝に銘じ、それぞれの課題に関する皆様どうしのつながりをつくり、少しずつ関係を修復して、相互理解を深めて、解決策を模索していく以外に解決策はないように思います。一人の環境カウンセラーとして、又、KECA としてどのようなお手伝い出来るのか、考えていきたいと思っています。



交流会の冒頭で挨拶する河野 KECA 理事長

福島訪問記（2019.8.3~8.4）

大竹 順之（横浜支部）

2011年8月に始まった KECA 会員有志による福島訪問は今回で6回目です。私は、3回目になります。2日間の限られた時間の中で、見学場所・交流会・など適切に計画され、実行されました。頂いた資料も大変参考になるもので、理解を深めることができました。大曾根さん、長澤さんに厚くお礼を申し上げたいと思います。

毎回訪問時に考えることは、東日本大震災被災と原発に伴う被害の2点です。2011年⇒2016年⇒2019年の変化をみると、前者の被災地の復興は目に見えて変化していることを、実感できました。ただ、どのようなプロセスで復興計画が決められ、住民の方々の意見反映が盛り込まれた結果なのか、不明な点は残っています。

震災復興の事象を挙げると、①太陽光発電パネルの大量設置、②保管除染土壌の大幅減少、③慰霊碑の設置、④工事車両（ダンプ）の減少、⑤北泉海岸にみる堤防などの復興工事の完了、などが印象に残りました。8年でここまで来たのかと思いましたが、一方で、除染が終わり帰還困難区域の解除後も、元の町に戻らない人が圧倒的に多いと聞くと、原発事故を伴った福島県の現実なのだと気づきます。そこでは、私たちは何をすればよいのでしょうか。



原発については、福島第一原子力発電所（1F：イチエフ）見学に強い関心がありました。原子力発電について、エネルギー計画の中でどのように位置づけるか、廃炉予定の原発の解体計画、進行中の核燃料の再処理工場建設、明確な総合的なビジョンが知らされないと感じる状況の中で、莫大な費用を要する事業を、これから監視していく必要があると思います。一方の当事者である東京電力がどのように説明されるかと考えました。その場合、原発事故以来だけではなく、原発がスタートした時からの正しい、透明性のある情報・事実を踏まえて、考えられることが重要と思っています。今回の見学から少しでも考えるヒントをもらえるならば、とても良いことと期待していました。1Fの置かれた立場から、いろいろな制約の下の受け入れと思いましたが、もう少し時間が取ればよかった



と思います。新聞、テレビ等で断片的に知る情報ではなく、現地で、自分の目で状況を体感することができたことは、良かったです。

民宿一番星での夕食・懇親会は、ちょっとおとなしかったですね。翌朝、予定外のバスツアーで、相馬の馬、慰霊碑、仮設住宅群などをご案内くださりありがとうございました。

道の駅南相馬での初めて聞く「法螺貝吹奏」の歓迎はうれしかったです。しかし、昼食をはさんでの「相双地方地域再生創造プロジェクト実行委員会」の方々との談話会では、震災当時の生々しい経験談や、東京電力や政府の対応について厳しいご意見がありました。まさに、震災の復興はまだまだ続けなければならないことが、山積みであることを認識させるものでした。

盛夏の中、参加者 14 名がトラブルもなく帰横できました。大曾根企画者の綿密な準備と現地での配慮は素晴らしく、改めてお礼申し上げます。

福島の皆さんとの交流が今後も続くことを祈念しています。

相双地方地域再生創造プロジェクト実行委員会他との交流会、東京電力原子力発電所廃炉状態見学（令和元年 8 月 3～4 日）

大野 昌美（横浜支部）

参加者 14 名。朝 6 時 50 分、横浜駅東口から貸切バスで福島に向かう。道中、KECA の現状についてのアンケートに回答し、車内にて昼食、12 時 15 分東京電力廃炉資料館に到着。机上説明や展示物を見学後、福島第一原子力発電所に向かう。

予告されてはいたが、発電所入構のためのセキュリティは厳重で、運転免許証による本人確認を済ませたあと、金属探知機ゲートを通る。空港での検査同様、身に付けている小物はすべて別箱に入れねばならない。ズボンベルト、鎖、財布、時計等をひとつひとつ外し、やっと通過出来た。長袖、長ズボン着用を確認し、さらに放射線量暴露検知器を着用して専用バスに乗る。放射線量測定器を持った説明員が同乗し、解説付きで約 3 時間、立ち入り禁止地域などを出たり入ったりした。

立ち入り禁止地域では、それぞれに監視員がいてゲートの開閉をしてくれる。もちろん、原子力発電所も車内から見るだけで、撮影も禁止であった。

現在、東京電力での最大の問題は、処理済み汚染水の置き場である。今後 3 年で、処理済み汚染水タンクで敷地がいっぱいになる。安全性の高い処理水は海へ放出したいと政府へ掛け合っているが、なかなか許可が下りないと言う。韓国の福島県産品輸入禁止や最近の日本製品不買運動にも絡む問題で、処理水放出については判断が難しいのであろう。

15 時 40 分、浪江町役場で相双地方地域再生創造プロジェクト実行委員会の長澤会長や地元の人、岩橋さん、千葉からの参加者 2 名と合流、民宿「いちばん星」に向かった。そこで KECA・福島・千葉グループ三者合同で宴会、福島産品を食して一泊。その際、ホテルにはない民宿なりの不便さを味わった。

翌早朝、「相馬野馬追い」で有名な馬の飼育場を見学してから朝食をとった。その後、長澤会長の自家用車の案内で、福島では有名な「自走草刈り機」のある北泉海岸に立ち寄り、海風を楽しんだ。たまたま散歩中の千葉グループの女性が捻挫した時、いつも持参し

ている「ロキソプロフェン」湿布薬が役に立ったのは何よりであった。

福島的一大研究開発構想であるロボットテスト場建設用地に立ち寄った後、「道の駅南相馬」に到着し、福島・神奈川・千葉のメンバーによる懇談会となった。

最初に雲雀法螺貝同好会による法螺貝演奏があり、その大音響にはどぎもを抜かれた。KECA 会員の法螺貝の試吹奏あり、地元民謡「相馬流山」の独唱ありで大変な盛り上がりであった。特製弁当や当地婦人会による家庭野菜料理がどっさり出され、美味しい食事をしながらの意見交換会となった。

福島側からは、原発事故から 8 年経っても福島には放射線管理区域が残り、事故前の人口にはなかなか戻らないことや、風評被害による経済的ダメージ、また事故当時の東京電力の対応や、政府の処置などに対する不満が述べられた。

環境省福島地方環境事務所の話によると、除染事業は令和 30 年度以降まで続くとのことであった。もともと天災ではあったが、後に人災と言われるほどになった原子力発電所事故対応の不味さは、何時までも尾を引くものである。

郡山アマチュア無線グループによる福島復興支援活動についての話は、元 JA2LO アマチュア無線局長として懐かしく、また竹トンボを復興の一助としていることも、同じ仕事を趣味とする者として感慨深かった。

会食後、KECA グループは福島グループの至れり尽くせりの素晴らしいオモテナシに感謝の気持ちを伝え、帰路についた。

今回の旅は、旅行嫌いの私にとっても素晴らしい人生の一ページとなった。世話人・大曾根健久氏に心から感謝申し上げる。



自走草刈り機

福島仲間たちとの交流会参加感想

小川 斉（湘南支部）

はじめに

この度 KECA 主催による福島交流会に参加させて頂いた。この交流会は東日本大震災の年から実施されており、今回はその 6 回目で 14 名の参加との事であったが、私は初めての参加であり興味が多い参加であった。これまで福島第一原子力発電所の被害状況は報道等でしか知らなかったが、今回の福島交流会参加により原子力発電所の事故の状況及び周辺住民の方々の大変な苦悩に対する認識を直接に知る事が出来、自分にとっては有意義な交流会であった。

1. 福島第一原子力発電所廃炉作業について

①東京電力廃炉資料館で福島第一原子力発電所の事故内容及び現在の燃料デブリの取り出し等困難な廃炉作業状況の説明を受け、その後バスの中から実際の福島原子力発電所廃炉作業の外観状況及び排水の処理水のタンク群を見たが、原子力発電事故の深

刻さを改めて感じた。

②汚染水（冷却廃水処理水）について

原子炉内部に残る「燃料デブリ」を冷却し続けるために使う冷却廃水は放射性物質の高濃度汚染水として排出され、その廃水は多核種除去設備（ALPS）等により浄化処理されているもののその処理水はトリチウム等の放射性物質が完全に処理されていないとの事。現状ではその処理水は海に放流できないため発電所敷地内に沢山のタンク群に貯留保管されていたが、現在その処理水の更なる最終処理方法、放流先がまだ決まっていないとの事。現在ある貯留タンク群は3年後には敷地内では満杯となるとの状況の中「国の委員会において風評被害などの社会的観点も含めて丁寧に議論を進めています」との事であるが、これらの問題について関係者は十分に認識していると思うが議論だけでなく早急な方針決定が必要であると改めて感じた。

2. 大熊町・双葉町帰宅困難地域状況について

チャーターバスの車窓から大熊町・双葉町帰宅困難地域の状況を見させてもらったが、震災後8年経っても帰れない、帰っても生活の基盤が回復していない等の理由からと思うが、敷地入口に柵が設けられ入れない状態、荒れた状態の空き家が多く見られ、東日本大震災による福島第一原子力発電所が及ぼした災害の大きな悲惨さ、地元の皆様の痛みを感じた。

3. 浪江町請戸・南相馬市沿岸地域・除染廃棄物仮置き場等の状況見学について

①沿岸地域は、大震災では大津波が押し寄せ大きな被害があった海岸と思われるが現在はその面影はなく、整地されてきれいな海浜公園となっていた。

②車窓からではあるが、ところどころにシートで覆われた除染廃棄物の仮置き場が見受けられた。これらの除染廃棄物は、現在は仮置き場であっても、いつかは中間貯蔵施設へ搬出されると思われるがそのスケジュールは決まっているのだろうか。長期間になっていないだろうか。住民の方々の苦労が垣間見える感じがした。

4. 相双地方地域再生創造プロジェクト実行委員会との交流について

最後の行事として道の駅南相馬の多目的ホールで開催された相双地方地域再生創造プロジェクト実行委員会の皆様との交流会。大変有意義な交流会であった。初めに立派な装束の皆様による法螺貝吹奏による歓迎演奏、自分は音も出なかったが法螺貝体験吹奏、大震災後の貴重な体験報告、談話会形式の活発な交流、どれをとっても南相馬市の皆様との交流は心に残るものであった。



吹けども吹けども音は出す

最後に

今回の福島交流会 KECA 事務局の皆様、ご協力頂いた相双地方地域再生創造プロジェクト実行委員会の皆様及び地元でご協力頂いた皆様、貴重な体験を得る事ができました。有意義な交流会でした。今後の自分の参考にさせていただきます。有難うございました。追伸：気を付けて記載しましたが記載内容に間違い、記載不十分な箇所または失礼な箇所があった場合はご容赦下さい。

「2019 福島の仲間たちとの交流会」に参加して（報告）

掛橋 俊彦（県央支部）

神奈川、横浜が連日の 34 度が続いていた中、福島県の浜通りでは、初日は 30 度を超えたものの、2 日目は 30 度を下回る、好天に恵まれた二日間であった。福島には、20～30 年ほど前に仕事の関係で幾度か訪れたことはあったが、浜通りは今回が初めてである。

私は、震災前・原発事故前まで原子力発電は必要だと考えていたし、事故以後も、非常用電源設備のリスク対策が施されていれば、重大事故には至らなかったと考えていた。しかし、一方では避難を余儀なくされ、今も故郷に戻れない人がまだ三万人以上もいることから、実際に被災された人たちの現状も見聞きした上で、自分の「原子力発電」に対する考え方を見直さなければならぬと感じていたところに、今回の交流会企画の案内があり参加させていただいた。また、不謹慎であることを十分承知の上で付け加えれば、破壊された原発を実際この目で見てみたいとの興味本位の部分もあった。

現地を視察し、福島の人たちと交流して、自分の原子力発電に対する考えを見直した結果は、シンプルに「新たな原子力発電所は不要」である。

今回の大震災による原発事故は、地震ではなくその後の津波と津波による全電源停止が原因であるとされている。つまり津波対策が万全であれば今回の事故に至ることはなかったのかもしれない。だとすれば、地震対策は現在の定められた技術基準、今回の反省を踏まえた津波対策を施した発電施設であれば、将来起こりうる天災に対処できるかもしれない。しかし、40 年～50 年前に 50 年後の災害を予想できなかったように、これから起こるかもしれない人災、テロや戦争を想定する場合、どこまですれば安全なのか想像もできない。何れにせよ、一旦コントロールを失うと制御が効かなくなる仕組みは、リスクそのもの。今だからわかる、今だから言える、コントロール出来ない事はやらないことが、これからの良い選択だろう。

三年前には宮城県を訪れ、被災地の視察や行政の方から色々な話を伺う機会があった。大川小学校の跡地も訪れ、津波の怖さと残酷さを目の当たりにした。ただ今回福島を訪問して感じたのは、宮城県は被災の時を起点に復興が始まり再建が進んでいる。方や福島はまだ復興途上、いやまだスタートラインにとどまったまま、いつから復興・再建が始められるのか、将来が見えない状況にあると感じた。しかしお会いできた方々は前向きに明るくされている。一方「東電（という企業）は一生許せない」と吐き捨てるように言い放つ言葉には、怒りや恨みだけでなく、まだまだ解決されない現状のやり切れない思いが込められていると感じた。「津波」を恐れはしても恨むことはないが、企業や組織は怒りや恨みの対象になる。

もう一つ気になることがあった。津波被災地に立ち並ぶ太陽光パネルの群れである。再生可能エネルギー普及が推進される昨今、太陽光パネルは他の手法よりも導入しやすいために普及が進んでいるが、使い終わった後の処理をどうするかがよくわからない。今でも、



津波被災地に立ち並ぶ太陽光パネル

災害で損傷したパネルが適正に処理されずに感電事故や有害物質の溶出が問題視されていることはあまり伝わってこない。リサイクル・廃棄方法は確立されているのだろうか。確立したうえでの普及推進であれば問題はないが、そうでないのなら、レベルは違っても原子力発電を推進していた 50 年前の動きと重なる。「二酸化炭素を発生しない」、「電源開発促進税」と「再生可能エネルギー発電促進賦課金」。デジャヴ。将来、問題なく廃パネルがリサイクルや適正な廃棄が行われるのか、あの風景を見て心配になった。

さて、今回の研修を通じて何が得られたのか、環境カウンセラーとしてどう活かしているのかを考えると、直接被災地の方々の思いに報いる行動はとれないものの、カウンセラーとして誰かに何かを伝えようとする時に、片方の考え方や意見をもとに判断するのではなく、もう片方の意見・反対の立場の意見やそれらの背景を含めて理解することが大事だということが改めて確認できた。常に物事には裏と表、メリットとデメリットがあるが、つついそれを忘れて、もしくは恣意的に片方の意見だけを取り上げてしまうことがある。そのことの当事者であればやむを得ない場合もあるが、多面的に物事を考え判断するよう心掛ける、またそう考えられるような伝え方をするよう心掛けたい。

最後に、今回の交流会を企画・準備して下さった大曾根様はじめ関係スタッフの皆様、ありがとうございました。なにより、福島でお世話になった長澤様、岩橋様、環境カウンセラーの方々、相双地方地域再生創造プロジェクトの皆様、雲雀法螺貝愛好会の皆様、ほか多くの福島の方々に感謝申し上げます。大変ありがとうございました。

福島交流会の感想

今回の交流会で一番強く感じたのは連携の大切さです。現地の方々も、そのことを口にしておられました。我々は福島の方々のことを思い、我々の応援の気持ちが少しでも現地の方々の力になり、地域内・外の連携がより一層進むことをお祈り申し上げます。

私の親族は福島県西白河郡西郷村に長年お世話になっております。福島県の皆様のご多幸をお祈りさせていただきます。

岩村 順雄（横浜支部）



慰霊碑の前で（右端が筆者）

福島交流会の感想文

近藤 勝養（川崎支部）

1. 参加の理由

大津波の年にも参加したが、今回は原発の廃炉作業現場に入れるとのことで、急いで、参加の申し込みをした。

2. 感想

原発の事故現場を身近に見て、放射能汚染の大きさ、怖さを実感しました。大きなプロジェクトにおける組織のトップの経営判断のミスが、いかに重大な影響を及ぼすかを少し理解しました。今後の生き方の教訓にしたい。

3. 事故原発の廃炉作業現場

膨大な人員が、膨大なお金を使って、膨大な時間をかけて、実施しているのが良く分かった。しかし、この作業にもムダが多くあるようだ。住民を守る、環境を守るとの錦の御旗の下では仕方がない部分もあるが、ムダが多いように感じた。

4. 除染地域

8年前の大津波の残骸はなくなっていたが、壊れた建物もかなりあった。住んでいた人が見たら、いかに悲しくなるか想像した。

5. 地元の人との交流

地元の方々との交流は特に良かった。極めて厳しい8年を生きただ中で、元気を失わずに、地域を盛り立てる活動をしていることに感動しました。特に、ほら貝の音は心に響きました。郷土料理もおいしかったです。

6. 感謝

今回参加して本当に良かったです。やはり、現地現物現実にふれる大切さを痛感しました。この機会を作ってくれた、大曾根さんに深く感謝します。

8年後の福島

木村 信幸（横浜支部）

あの大震災から8年4ヶ月、最初に私達 KECA のメンバーが福島を訪れてから丁度8年が経過した。前回の訪問からは3年近く経っている。その後の復興状況をこの目で確かめたい。そして特別なことはできないが、仲間との旧交を温め、現地の人たちと何がしかの交流ができればという思いで参加した。それに加えて原発の廃炉作業状況が見分できたのは得難い体験であった。以下、神奈川から6回目（ECUからの訪問を入れると7回目）のわが福島訪問の記である。

■第1日（8月3日（土）、福島第一原発見学～農家民宿いちばん星）

横浜駅東口を早朝に出発したチャーターバスは、常磐自動車道を経由し予定より1時間ほど遅れて「東京電力廃炉資料館」に到着した。これまで廃炉資料館なるものの存在を知らなかったが、昨年11月にリニューアルオープンした施設の由。福島第一原発の全体が俯瞰できるジオラマや、各号機の廃炉状況を示す模型、3種類の構内作業服等各種展示物が多い。各種資料を使った説明を聞き、映像を視聴して今更ながら事故当時の過酷な状況を思い出さざるを得なかった。次いで、第一原発



廃炉資料館 ジオラマ

へ移動し、念入りな入構チェックを受け、専用バスで 3.5km²の広大な構内を見学。映像や写真でしか見たことがない原子炉建屋、浄化後（ただしトリチウムを含む）の処理水を貯めている 900 基以上ものタンク、各種設備を間近に見分できたのは貴重な体験であった。それにしても 110 万 m³以上もの処理水を今後どうするのか。方法は 5 つほどあって現在検討中であり未だ決まっていないということであった。2 号機と水素爆発を起こした 3 号機の間（260～270 μSv/h）を陸側から海側に向かって通り抜けたが、建物が覆われているせいか生々しい実感はなかった。廃炉に 30～40 年という気の遠くなるような年数が掛かると聞いて何故そんなに掛かるのかとも思ったが、相手は放射能。安全第一で作業が進捗するのを祈るのみである。

廃炉資料館から宿舎の民宿へ向かう途中、福島の長澤さんらと浪江町役場で合流し、千葉の倉田さん・竹山さん、地元の岩橋さんが我々がチャーターバスに同乗し、岩橋さんのガイドで復興状況、以前訪れたときに案内された津波が押し寄せた道路等を見て回った。

以前と違うのは太陽光パネルがやたら目についたこと、そういう土地利用が妥当なのかもしれない。

農家民宿「いちばん星」には予定より早く着き、ゆっくりと湯に浸かって旅の疲れを癒すことができた。KECA の 14 名と長澤さん等 4 名の総勢 18 名の懇親会はアルコールも入って賑やかな宴となった。しかしながらそこで印象深かったのは、事故を起こした東電に対する地元住民の風当たりの強さである。被災住民からすれば当然のことかも知れないが、その思いは終生消え去ることはないだろう。

■第 2 日（8 月 4 日（日）、復興状況視察他～道の駅南相馬で交流会）

民宿オーナーのご好意で朝食前のドライブに出かけた。野馬追の馬が飼われている農家、矢沢地区慰霊碑、仮設住宅の現状等、見る限りでは悲惨な災害の痕跡は見当たらなくなっている。

朝食後、チャーターバスで最初に向かったのは、北泉海浜公園である。2011 年 8 月に来たとき最初に訪れた場所である。当時は北泉海水浴場と言っていた（今もそれはある）。被災し傾いた鉄筋コンクリート造の建物は既になく、きれいに整備されてどこにも災害の爪



農家民宿 いちばん星



北泉海水浴場 2011 年 8 月 10 日（水）



同 左 2019 年 8 月 4 日（日）

痕はない。変わらないのは遠くに見える火力発電所の建物だけである。近くでロボット芝刈り機が動き回っている。GPS システムを搭載し、スマホで監視中という。

その後、建設整備中の福島ロボットテストフィールドなる施設を敷地外から眺める。震災や原発事故で失われた浜通り地域の産業回復のため新たな産業基盤の構築を目指す国家プロジェクトとして始まった「福島イノベーション・コースト」構想に基づいて整備が進められており、2019 年度中に概ね整備されるようである。

ほぼ予定通り、懐かしい道の駅南相馬に到着し、9:30 から「相双地方地域再生創造プロジェクト実行委員会との交流会」に臨んだ。正装した雲雀法螺貝愛好会（7 名）の皆さんの雲雀法螺貝吹奏による出迎えを受け、黙とうの後、改めての雲雀法螺貝吹奏、民謡披露と続いた。初めて法螺貝体験をしたが、音が出せなかったのは返す返すも残念であった。



雲雀法螺貝愛好会の皆さんの法螺貝吹奏

懇談会では、実行委員会の長澤会長、KECA 河野理事長の挨拶の後、体験談等の説明があったが、そのいくつかをかいつまんで紹介したい。

先ずは当時の状況について道の駅南相馬駅長大竹氏の説明があった。水が使えなくなったのが一番大きい。地震の被害はなかったが、原発から 23km、浪江町等から避難してきた人たちのため 24 時間寝泊まりして対応した。5 日後には大きな避難所に移動していったが、一番困ったのはトイレが使えなかったこと。以降一人でトイレ掃除をしたという苦労話は実感がこもっていた。全国からの支援物資の収集・配布、放射線に関する説明会の実施も。野菜は作っても売れないだろうということでモチベーションは下がったが、6 月 1 日からの営業を決めた。一步踏み出さないと始まらない、生産者との二人三脚でようやく現状を取り戻すことができたという体験談であった。

次いで、大甕地区福祉委員小西都氏からは、震災当日の午前、卒業式があった中学校の校庭は車で一杯になった。届けられた 1 俵の米でご飯を炊いて食べてもらい喜んでもらった。震災時に皆さんに喜んでもらえる行動ができたことからボランティアを続けてきた。そして災害時に何をしなければならないかを学んだ。皆さんの温かい支援が何よりであるとの言葉は実体験からの重みを感じられる。

NPO 法人さぼーとセンターぴあ施設長郡信子氏からは障害者がどんな状況下に置かれ、どんな行動をとらざるを得なかったか等レポートと共に生々しい報告がなされた。原町聖愛こども園の園長遠藤美保子氏からは、放射能汚染から如何に子供たちを守るか苦闘の 8 年がレポートと共に報告され、最後に「原発事故はどう考えても許せない。絶対安全だと聞かされていたが非常用電源は地下にあった。まさに人災だ。地域社会は確実に崩壊した。

そういう中であっても今を生きる。原発事故は永久に終わらない。」との重い結びがあった。

環境省福島地方環境事務所（浜通り北支所）千葉昭一氏からは、「福島再生。除染、輸送（仮置場現状回復）及び中間貯蔵施設事業等の現状について」と題して報告があった。要は、放射性物質汚染対処特別措置法（2011.8.30）に基づいて表題の取組を実施しており、除染は帰還困難区域を除き 8 県 100 市町村の全てで面的除染が完了、並行して除去土壤の



仮置場から中間貯蔵施設に汚染土壤を運ぶダンプ

仮置場から中間貯蔵施設への輸送が進められており、輸送対象物量 1400 万 m³ の搬入を概ね 2021 年度に完了させる予定としている。

次いで、元福島環境カウンセラー協会所属の環境カウンセラーであり、郡山市民アマチュア無線実行委員会会長の佐久間光好氏から、市民レベルで社会貢献を行う、即ち、復興市民のために無線で全国、全世界へ元気を発信し、自分たちでできることをやろうと実践してきたこと、

そして福島県内に配置した基地局の現況等が報告された。

本人からの口頭説明はなかったが、長澤さんがまとめられた「震災・原発事故を伝える 2011.3.11 から 8 年 2 ヶ月の今」と題するレポートは、8 年間の歴史が刻まれ経緯がよく理解できる。

震災・原発事故から 8 年後の福島をありのまま記録に留めるべく綴ってみた。やはり現地に来て自分の目で確かめ、自分の耳で聞かないと人に本当のことは語れない。3 現主義ではないが、今後ともこの姿勢を大事にすると共に、一環境カウンセラーとして福島を忘れてはならないと改めて思う。お世話になった皆様ありがとうございました。



帰路、常磐富岡まで 3km 地点の線量

福島との交流会の感想

茂木 照雄（川崎支部）

令和元年 8 月 3 日、4 日の福島との交流会は有意義なものとなりました。原発施設の見学、交流会、海岸部の見学などで感動したことなど中心に短歌にしてみました。

破壊された二号機横の線量計は二百マイクロシーベルトを示しておれり

原発の非常電源は浸水せり発電できぬ後悔残る

アルプスにより分離された汚染水はコンクリート壁に囲まれており

原子炉建屋地下に築かれた氷壁は汚染拡大を防ぎおりぬ

胸に付けし線量計は炉を見学後もゼロを示せり
二千人の廃炉作業の人々は復興を目指して戦っており
除染廃棄物の中間貯蔵施設は立ち並び復興の歩み着実とみゆ
野馬追の行事を終えた馬たちは朝の飼葉を美味しげに食む
鎮魂のほら貝の音は黙禱せる我らの上を響き渡れり
ロボットのテストフィールドは被災地の期待と不安を秘めて歩めり
所有権の複雑さなりか防潮堤のところどころ途切れてありぬ
震災時に拠点となりし道の駅、トイレ用水の確保に力いれたり
震災より八年へても福島は風評被害に苦しみており
放射能の風評被害は長引き営農意欲は失われゆく
被災地の風評被害の根深くて農を継ぐ子の少なしと言う
大切なこの場所なれども憂えるは若き世代の被爆への危惧
避難先より戻れる人の少なくて地域社会は危機を迎えり
持ち寄りし炊飯器により作りしおにぎりは被災者を助けり
障害者の避難先での生活に困難のあり不安つのれり
震災から八年すぎて今のあり何も起こらない大事さ知れり
障害者の避難生活厳しとも家族一緒に暮らす幸せ
緊急時アマチュア無線は患者の命守ると普及員は語る
大震災の津波の色黒かりしは砂鉄の産地ゆえと知れたり
いつもいつも国の礎か福島は首都電力の二割を供給しており
大津波が襲いし海岸に立てられたる観音菩薩は海を見つめり

後述) 見かけは復興が八割程度進みつつあると言われてはいますが人や地域社会の問題はますます深刻化していくと思います。福島県産の農産物を買うなどできることから始めたいと考えています。



朝に草を食む相馬馬



観音菩薩は何を見つめ、何を思うのか

福島交流会および東電廃炉施設見学会に参加して

眞砂 文夫(横浜支部)

「交流会」

- 長澤会長のお世話でプロジェクト実行委員会のみなさんを中心に盛大にお出迎え頂いた。
- 雲雀法螺貝愛好会の皆さんの吹奏、南相馬市市長さんまでお出ましたただいで現状説明を受けた。
- 現地は帰還困難区域もあり、農業の復興も遅れており、まだまだ時間はかかると思われるが、口々に「我々の先祖は、天保の飢饉で富山から移民としてこの地で開墾し豊かな土地にしたDNAを持っている。それを受けついでいる子孫なのでくじけてはいられない」との強い気持ちと不屈の精神が、現在の元気の基となっていると強く思った。明るく穏やかな人間性を知り、かならず復興を成し遂げられると感じた。
- 南相馬市は、もと原町市といい、20歳の前半にお世話になったリコーの販売店の社長である杉山大作さんの出身地であり、大作社長のご近所に住む南相馬観光ボランティアの岩橋さんにも巡り合え、大作社長のおぼしめしを感じた。

「原発廃炉現場」

- 廃炉準備も始まったばかりでこれから40年、気の遠くなるような廃炉作業が続けられるのであろう。
- どんな事態になっても、人に迷惑をかけることなく、会社も存続する事業継続プランの作成を企業の責任で行うことの大切さを、自分のこととして改めて肝に銘じた。
(50年前のこととは言え、地下電源が使えなかったらどうなのかとの事業継承プランを思いつき、提言する人がいなかったのかと、いまさらながら悔やまれる。人間の弱さか、人間のおごりか。環境に関わる私たちにとっても大きな教訓ではないだろうか)

「総括」

- 今回、河野理事長の誘いで参加したが、正直なところ何ができるのかと言う疑問を持ちながら現地視察、交流会に臨んだ。皆さんにお会いして、復興に直接手を差し伸べられることは少ないが、「インターネットを通じて私たちの住む神奈川県、日本、世界に向けて、見た・聞いたままの情報を発信する」くらいのお手伝いはできることを確信した。
- 南相馬から戻っての4日～6日の3日間、夜なべをして自分のFACEBOOKと2本のホームページ使って3本の情報発信を行なった。また、18日納期の報告書作成に取り組んでいる。
この度の報告書作成に当たり、記事内容、参加者の方のお名前に不安も有ったので、記録内容の確認を「相双地方地域再生創造プロジェクト実行委員会 長澤会長」に御願したところ、お盆のお忙しい所にも関わらず、沢山監修頂いて本日完成に持ち込むことができました。長澤会長の温かい心遣いを真摯に受け止めて、長澤会長との連名で今回の交流会の記録とさせていただきます。ありがとうございました。

2019 年福島第 1 廃炉見学会、及び交流会に参加して

千葉 雅子（横浜支部）

- 福島第 1 廃炉や帰還困難区域を見学して、原発廃炉の道は険しく遠いと改めて感じました。今回、実際に見学出来て良かったです。
- 交流会では、被災地の方々の声を直接聞くことができ良かったです。「目に見える復興はされているが、見えない所の復興はされていない、自分たちは、原発事故は人災であると思っていて、決して許すことができない！」と言っていました。
- 原発事故が起こるまで、電気の大部分を関東に送っているとは知らなかったそうです。事故の直後、3,000 人の労力をかけて火力発電所の復旧、関東への送電を第 1 の優先事項としたのが許せないと言っていました。
- 「高い防潮堤が建設されているが、いったん防潮堤を越えた海水はどうなるのか？地元の方は高い防潮堤を望んではいない。地域再生創造プロジェクトも、政府が勝手に決めたが、本当に地域の為になるのか期待が持てない。」と言っていました。やはり、被災地の方々がどう思っているのか、直接聞かないとわからないものだと思います。
- ほら貝の演奏や手作りの美味しいお料理のおもてなしを受けて、感激しました。これも、震災直後から KECA の木村さんはじめ皆さんがずっと交流を続けて来られたからだと思います。



新たに築かれた防波堤（奥）と防風林苗木

KECA 福島交流会 2019 年現地訪問感想文

原 洋夫（横浜支部）

1. 初めに

当交流会は 2011 年の東日本大震災発生以来ほぼ毎年訪問し交流を続けているとのこと。今回は東京電力福島第 1 発電所に関する資料館の廃炉資料館および発電所内の水素爆発で破損した廃炉を見学する現地見学も計画されていたので廃炉の現場を自分の目で見る貴重な機会でもあり参加させていただいた。

津波による福島県浜通りの被害についてはテレビでも放映されていたと思うが宮城県・岩手県の被害状況に比べて私にはあまり印象がなく今回の旅行で厳しい被害状況であることを理解したかった。

2. スケジュールと行事

第 1 日

6:45 横浜駅東口発、小型バスにて常磐道広野 IC から国道 6 号線で富岡町にある廃炉資料館着 12:00

→資料館で説明を聞き、専用大型バスにて発電所（大熊町、双葉町にまたがっている）見学。土曜日午後で工事は休止中だった（気温が 30℃以上だと作業中止になる）

- 約 1h の見学で ALPS（多核種除去装置）、キュリオン（セシウム吸着装置）、凍土壁上部、トリチウム処理水貯蔵タンク群、廃炉 1 号、2 号（この間をバス通過）、廃炉 5 号、6 号と緊急用ディーゼル発電機棟
- 15:00 資料館に戻り浪江町役場駐車場へ北上（途中の 6 号線は大熊町、双葉町では両側が無人建屋区域）
- 16:00 地元の長澤様、岩橋様の案内で多くの住民が亡くなった浪江町請戸沿岸のつなみ防波堤、除染廃棄物仮置き場を見学
- 南相馬市内の民宿一番星着 17:00

第 2 日

6:00 民宿ご主人の好意で相馬の馬牧場、南相馬の海岸を見学。海岸付近は高い堤防とともに各所に数mの高さで台形状に積み上げた黒いプラシートで包まれた除染土の塊が各所に見られた。

8:00 出発

道の駅南相馬駅に向かう途中で東北電力原町火力発電所隣の北泉海水浴場（サーフィン会場整備）経由で道の駅到着

9:30～13:30 相双地方地域創造プロジェクト実行委員会との交流会

地元の雲雀法螺貝愛好会の演奏、黙とうのあと、多くの実体験者からの体験談を聞かせていただいた。3月11日14時46分の震度6弱地震発生から約50分後に襲った津波は海岸から5kmまで侵入した。津波の被害はこの地域で636人の犠牲者を出し、多くの民家を奪われた。さらに原発破損により放射性物質汚染状況調査地域に指定された。悪夢の時から8年4カ月が経過した。道の駅駅長、地区福祉委員、建設業社長、介護福祉施設長、認定こども園園長並びにこの地域にお住まいの方々から体験談をうかがった。

また、環境省福島地方環境事務所の方から放射性土壌等の除染、輸送、中間貯蔵施設事業の状況についての説明や郡山アマチュア無線会員の「自分たちで身を守る防災について」の話聞いた。

14:00 道の駅出発

地元の方々に送られ、南相馬 IC から常磐道、東関道経由で 19:30 横浜駅前着
たまたまであるが、その時間帯に東北地方で地震発生、南相馬は震度 4 強であった。

3. 学んだこと

1) 福島第一原発廃炉撤去は次世代への大きな負の遺産である。直接の責任者である東電と国、県、市町村は責任をもって対策を継続すること。

主な除染問題は 3 つあるといわれている。

- ①廃炉；第 1 号炉から第 6 号炉撤去は 40 年を目標としている
- ②処理水対策；トリチウム水は汚染地下水を除染した後の重水素水で現在 110 万 t 保管中、150t/日増加し令和 4 年夏ごろ敷地満杯となる見込み。海中放水は風評被害となる



発電所構内で汚染水を保管するタンク群

が他に良い方法なく政治的解決が必要

- ③発電所内に保管されている各種放射性部材、各地の表層除去された放射性物質汚染土壌等は仮汚染土保管場に保管後中間貯蔵施設に輸送され中間処理で汚染土として分離される予定。今は台形状に整地され、表面をプラスチックシートでカバーされている。これらの処置がいつになるか想像もつかない。

東電廃炉に関する年間予算は 2000 億円とのこと。これで①, ②への対応をするが、一方では電力自由化の中で価格競争を強いられており厳しい情勢である。

2) 南相馬のこと

実感したのは車で約 5 時間、電車では常磐線は富岡—浪江はまだ不通で来年 3 月開通するらしい。首都圏から遠く産業誘致に苦勞されている。震災後の避難で若い人が戻ってくる職場がないことが大きな問題となっている。国・自治体でも工場用地を準備しているが、なかなか来ないのが実情である。よって高齢化は一層加速している。一方、大規模太陽光発電場や野菜人工栽培施設など新しい産業も見られた。

4. まとめ

原発破壊による環境汚染が地元住民に多大な迷惑をかけていることをしっかり認識して現地の状況に注目し、個人的・継続的に何か貢献をする必要があると痛感した。

最後に本交流会の幹事できめ細かく準備していただいた横浜支部の大曾根様、南相馬の長澤様、被災地案内していただいた岩橋様、南相馬での交流会に出席された皆様に心より感謝します。

福島交流会の感想文

玉川 達久（横浜支部）

1. 今の福島を訪ねました

2011 年 3 月 11 日福島で何があったか？

地震、津波、原発事故から 8 年後の被災地を 8 月の 3・4 日に KECA メンバー 14 人で訪問した。地元の復興再生事業に取り組んでいる皆様との交流会では地元民謡「相馬流山」を披露頂き、これからの「福島」に胸を熱く致しました。

2. 東日本大震災

平成 23 年（2011 年）3 月 11 日 14 時 46 分、宮城県牡鹿半島 東南東約 130 km の三陸沖深さ約 24 km の地点を震源とするマグニチュード 9.0 の「平成 23 年東北地方太平洋沖地震」が発生した。この地震による災害及びこれに伴う原子力発電所事故による災害を「東日本大震災」と呼ぶ。最大震度 7、震源域は南北約 500km、東西約 200km に及んだ。発生した津波は波高 10m 以上、最大遡上高 40m 以上で、北海道南岸から東京湾を含む広大な範囲で被害が発生。海底は東南東へ 24m 移動し 3m 隆起、牡鹿半島は東南東へ 5.3m 移動し 1.2m 沈下した。

地震・津波による被害は、死者 1 万 5 千名以上、行方不明者 7 千名以上、他に震災関連死も多数あり、阪神淡路大震災の死者 6,434 名をはるかにしのぐ人的被害である。被害額は原発関連を別にして試算では約 16.9 兆円（阪神淡路大震災は 9.6 兆円）。

3. 福島第一原子力発電所：地震及び津波は、原子力施設にも重大な被害を与えた

被災地には女川、福島第 1、福島第 2、東海第 2 の各原子力発電所があり、原子炉が自動停止した（女川、福島第 2、東海第 2 は重大な原子力災害には至らなかった）。

福島第 1 原子力発電所は、地震から約 1 時間後に約 15m の津波に襲われ 1・2・3・4 号機で電源喪失し、水素爆発等の異常が発生。原子炉冷却不良で 1・2・3 号炉で炉心溶融が発生し、大量の放射性物質を漏洩した。チェルノブイリ原発事故と同等に位置づけられている。

福島県浜通り地方を中心に「帰還困難区域」「居住制限区域」が設定され、住民避難は長期化している。セシウムのは大半は森林の地中に留まっていると考えられ、福島県内の人的被害は 1,300 名以上が原発関連死であった。

福島第 1 原発廃炉作業現場の構内視察専用バス内から見た現場モニターによる放射線量は 270 マイクロシーベルトと表示、見学後の放射線ばく露値はゼロであった。廃炉作業員の作業環境は想像以上に改善されていた。廃炉作業の近々の課題は、汚染処理水の措置と思われる。

4. これからの福島：がんばれ日本！

復旧と復興、犠牲者の追悼、被災者の支援、震災の教訓を活かす、などがキーワード。

当面の対応として、国土や社会インフラの再構築、放射性物質に関する環境モニタリング、汚染土壌の浄化や汚染水処理、原子力発電所の周辺地域住民の健康調査、電力の安定供給確保や省エネルギーの推進等と考える。これらの解決に資する科学技術は、復興・再生、そして新たな成長へ貢献することが求められている。原子力事故被災者への補償は早急な解決が望まれる。

福島の復活は道なればである。福島県相双地方で復興に取り組んでいる方々の活動が明日に繋がり、悲しみを乗り越える事を願い、将来を見届けたいと、今回の交流会で再認識した。

復興は進み、復興は進まずー8年目の『福島の仲間たちとの交流会』に参加してー 大曾根健久（横浜支部）

今回、KECA 福島交流会の幹事役として事前調整を行いながら一参加者として現地を訪れました。KECA の福島交流会への参加は初めてでしたが、事故前に福島第一原子力発電所（福 I）の構内に入ったり、震災後に福島浜通りの津波被災地を訪れたり被災された方からお話を伺うのは初めてのことでありませんでした。

震災の起きた年の秋だったと思いますが、手入れが出来なくなった民地の草刈りのお手伝いをするために南相馬市小高区に入りました。作業の前日、宿に向かうバス車中から田んぼの中に乗用車や自動販売機が何台もひっくり返っている風景を見て、津波のすごさを感じたものです。草刈り作業時には、その地区名（小高区浦尻）や地域の状況の説明もありませんでしたが、なんと、今回の現地見学途中、集合写真を撮影したところから 100m も離れていないところでした。すぐ近くで集落全部が津波に流されて無くなっていたことは知るよしもありませんでした。浪江町内において、居住が制限された区域に一

時帰宅する方々の入退域時の線量チェック作業をしたこともありました。その時は、受け持ち地点に行くまで、ひとっこ一人いない立入禁止地区を自動車に乗って移動しました。人の生活の気配を全く感じない風景に、異様な感じを受けました。別の機会には、福島浜通り地区南部で自然体験活動を行っていた方から、子どもたちが外遊びできないつらさや、その方の居住地の近くに放射性汚染物の焼却試験を行う施設が計画されていることへの怒りなどをお聞きしたこともありました。

しかしながら、震災並びに原子力事故後 8 年余り経つものの、発電所の構内を見たり、避難された方から、その時の体験や今の思いを直接伺う機会はありませんでした。

廃炉作業の見学では、本来、電気を作り出すべき場所（市民生活にプラスとなるべき場所）がタンク群と瓦礫の山に埋もれ、向こう数十年かけて延々と撤去作業を行う場所（マイナスの場所）になっている姿を見て、かつて火力発電所で勤務した経験を持つ者からすると、少々辛いものがありました。また、道路脇の水田には放置された車や自販機は見られず整地もされていましたが、大熊町や双葉町の帰宅困難区域では壊れた家屋は 8 年前と変わらない姿をしており、文字どおり「時が止まったままの街」でした。自分の生まれ育った家や街に戻りたくても戻れない方々の心中は、いかほどのものかと思いました。その思いを一層強くしたのが交流会でお聞きした体験談であり、現地案内の合間に交わした会話でした。特に「目に見える部分の復興は進んだが、目に見えない部分の傷はより深くなった」との言葉が印象に残っています。

今回の交流会に参加して、今回、自分の目で見て、耳で聞くことにより、テレビ・新聞を通じた情報とは全く別物の情報を得ることができました。それにより「見かけ上の復興は進んでいるが、真の復興は進んでいない」という思いをあらたにするとともに、今の自分に出来ることを一つでも行うことが、今に生きる者として、また首都圏に住む者としての務めと感じました。今回の交流会において辛苦の実体験に基づくお話しを紹介くださった皆さま、そして手厚いおもてなしをくださった皆さまに、あらためて御礼申しあげるとともに、エールをお送りいたします。

交流会参加の皆さん総出でのお見送り。
KECA 一行も、バス車中から手を振り返して感謝の気持ちを返しました。



4. これまでの福島交流会の足跡

2011年8月10日（水）～11日（木） 有志による福島研修会

南相馬市海岸部津波被災地の視察、被災者体験談・意見交換（於：道の駅・南相馬）、福島環境カウンセラー協会との交流・意見交換（於：コラッセ福島）、避難所訪問（於：あずま総合運動公園体育館）

【参加者】木村信幸、先崎 武、福田昭三、河野健三、原園信夫、高橋弘二、近藤勝養、山田徹郎、守谷喜芳、太田芳雄、植村國男、大竹順之



↑避難所「あずま総合運動公園体育館」に掲示した KECA からのメッセージ。前夜、宿の部屋でみんなで書きあげた。



写真上左：津波で押し流された乗用車
写真上右：亀裂の入った北泉海水浴場の堤防と原町火力発電所

2013年4月20日（土）～21日（日）

福島復興再生事業『にじをつなぐ～友・有・悠』への出展参加

南相馬市内の被災地見学、福島復興再生事業へのブース出展（KECA活動内容の紹介、珊瑚・ホラ貝などの展示、廃棄物利用工作物の陳列、手動発電ゲーム、変わり絵カードや六角返し折り紙工作の実演など）

【参加者】木村信幸、嶋田和夫、小山 稔、大野昌美、河野健三



写真左：南相馬女声合唱団による合唱
写真中：「ちゅうみサンゴ礁の生き物」の展示を見る子どもたち
写真右：変わり絵カードや六角返しの折り紙工作は大人の人たちに人気だった

2014年4月19日（土）～20日（日）

福島復興再生事業『にじをつなぐ～友・有・悠』への参加

原町区・小高区内の被災地の見学、福島復興再生事業『にじをつなぐ～友・有・悠』（於：道の駅・南相馬）への参加

【参加者】木村信幸、嶋田和夫、高橋弘二、河野健三、先崎 武、太田芳雄、加藤幸男、福田昭三、阪本光央



写真左：民家や屋敷林が流され荒涼とした津波被災地。所々に仰向けの車が放置されていた。
写真中：道の駅・南相馬の野外会場での環境カウンセラー同士の交流風景
写真右：福島・名古屋・神奈川の環境カウンセラーが一緒になっての記念写真

2015年7月25日（土）～26日（日） **有志で繰り出す「相馬野馬追」見物ツアー**

鎧兜の試着、騎馬武者行列見学、相馬野馬追い見物

【参加者】木村信幸、福田昭三、高橋弘二、河野健三、岩村順雄



鎧兜を試着して

騎馬武者の行列

野馬追いの会場風景

2016年9月27日（火）～28日（水） **福島の間人たちとの交流会と被災地を訪ねる2日間**

福島環境カウンセラー協会との交流会、南相馬市小高区内を中心とした復興状況や除去土壌等保管場所などの見学

【参加者】木村信幸、高橋弘二、河野健三、岩村順雄、大竹順之、嶋田和夫



除染土などを詰めたフレコンの集積場

除去土壌等の仮置き場



「除染作業中」の幟を立てての除染作業現場



街角に設置された放射線量表示板



津波を目撃した地点で説明する岩橋さん



閉鎖されたままの白石小学校

【編集後記】

今回の福島交流会の事務局役として企画・調整から報告書作成まで担当いたしました。それらにあたりまして、関係皆さまに種々のお手間やご協力をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。

この実施報告書をまとめながら皆さまの文章を拝読し、実りある交流会とすることができたのではないかと安堵しております。これも一重に、事前調整から交流会当日の進行に至るまでの長澤様の多大なるご尽力並びに南相馬の皆さまのご協力の賜と感謝しております。深く御礼申し上げるとともに、一日も早く真の復興が達成出来ますことをお祈りいたします。

2019年9月16日 大曾根

この実施報告書の作成費の一部には、参加者から徴集した参加費の余剰金を充当しています。

2019年度『福島の間人たちとの交流会』実施報告書

〔発行日〕 2019年9月24日

〔発行者〕 NPO法人 かながわ環境カウンセラー協議会

理事長：河野 健三 編集者：大曾根健久

〔住 所〕 〒231-0001 横浜市中区新港 2-2-1

〔Tel./Fax.〕 045-226-5822 / 045-226-5825

〔E-mail〕 37keca@kke.biglobe.ne.jp

〔U R L〕 <https://keca-kanagawa.jimdo.com/>